What's happening?

大学院先端技術科学教育部 環境創生工学専攻
化学機能創生コース 博士前期課程1年
KHOUNVISITH KAYNOY
クンヴィシット カイノイ［ラオス人民民主共和国］

日本での学生生活で楽しかったこと

日本での学生生活で楽しかったことはたくさんありますが、まず思い出されるのは他の国の留学生と行った旅行です。神戸、大阪、奈良、東京、四国といろいろな場所に行きました。日本は、県ごとにそれぞれ特産物があって、それらを見たり、食べたりするのがすごく楽しかったです。特に、奈良に行った時のお寺巡りは、私の中ですごく影響を受けました。今まで、写真では見たことあったのですが、実物のお寺を見るのは初めてだったので感動しました。行った時期も11月下旬で、ちょうど紅葉が多く見られみんなで写真をたくさん撮りました。

第二に、毎年行われるお祭りに参加できたことです。高知県のよさこい祭り、徳島県の阿波踊りに参加させてもらい非常に良い体験をしました。高知県、徳島県はお隣の県なのに、踊り方が全然違うことに驚きました。よさこい祭りは、激しい振り付けで覚えるのに精一杯で、たくさん練習したのを覚えています。阿波踊りは独特なステップとリズムに思わず見とれてしまいました。文化祭の国際交流会で同じ学科の友達と一緒に踊ることになったのですが、実際踊ってみると身体がついていかず、形になるまで時間がかかりました。しかし本番では、会場に来てくださっていたみんなも、一緒になって踊ってくれて楽しい時間を過ごすことができました。

第三に、研究室のみんなと毎日楽しい話しをしながら過ごした研究生活です。私の中で、研究室での生活は毎日忙しく大変な日々が続くものかと思っていました。研究自体は危険な実験もあり大変なこともありますが、先輩にも恵まれ非常にやさしく御指導していただき安全に実験できています。また留学生である私を特別扱いせずやさしく接してくれ、毎日面白い話をしてくれ笑わせてくれました。私自身、現在行っている、研究には非常に興味があり大学院に進学して研究を引き続きやっていこうと思っています。新しい四年生も配属され、また楽しい日々が続くかと思うと、今からワクワクしてきます。

まだ、徳島大学には2年間いるので、これから楽しい思い出をもっといっぱい作っていきたいと思います。

行ってきました 海外体験記

異国に垣間見た徳大

大学院ソシオテクノサイエンス研究部
先進物質材料部門
川崎 祐 かわさき ゆう

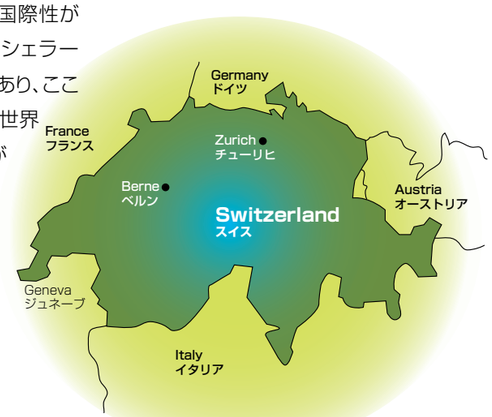
2006年6月から8ヶ月間、文部科学省・大学教育の国際化推進プログラムにより、スイスのポール・シェラー国立研究所で研究・教育活動に携わりました。スイスは南部のイタリアとの国境に横たわるアルプスの山々、観光立国のイメージが鮮烈ですが、一方で、北部を中心として、時計でよく知られるように工業立国としての側面を持っています。私が滞在したポール・シェラー研究所は、そんな北部も最北部、ドイツとの国境までわずか数十キロメートルという人口2000人弱の小さな村、ビリジェンにあります。

ポール・シェラー研究所では、私は凝縮系物質部門・中性子散乱グループに所属しました。そこでは、グループを統括するJœl Mesot教授 のサポートの下、低次元磁性体が持つ特異な磁性を、中性子やミュオンを利用して明らかにする研究の機会に恵まれました。徳島大学では、私は核磁気共鳴法を利用した磁性体の研究を行っていますが、中性子やミュオンを利用する事により、それぞれ異なる切り口で物質の磁性を観測する事ができ、これらを組み合わせる事で相補的な情報を得る事が期待できます。

スイスは小さな国土しか持たないにもかかわらず、地理的にヨーロッパの中央にあり、外国人の行き来の多い国際性が豊かな国です。中でもポール・シェラー研究所は、国際的な研究拠点であり、ここにはドイツ、ロシアを始めとした世界の様々な国から研究者や学生が集まっています。色々な国から様々な目的でやって来た面々と交流していると、自分が今どの国にいるのか分からなくなる感覚を覚え、国際化というより、むしろグローバリゼーションを強く意識する経験でした。また、研究を進める上で、多くの研究者やテクニシャンのサポートを受けましたが、その中で Tomizaki Takashi 博士と会う機会がありました。彼が徳島大学の卒業生である事を思いがけなく知り、世界で活躍する人材を輩出している徳島大学を誇らしく思いました。これからも徳島大学は世界で通用する多くの人材を送り出していくはずです。

私が住んでいたのは研究所の近くにある小さな村でしたが、そのため地元のスイス人との濃密な交流という貴重な経験を得る事ができました。一緒に暮らした Guido Meier さん、そのガールフレンド、2人の子供達、周辺に住む親戚の方々・・・休みの日には、ハイキングやスキー、湖畔でのキャンプと非常に充実した日々を過ごす事ができ、スイスの人々の優しい心遣いと共に、恵まれた自然に驚嘆の連続でした。

最後に、今回の滞在の機会を下さりました大野隆教授を始め、不在の間に何かとお世話になりました教職員の方々に深く感謝いたします。



ポール・シェラー国立研究所の西地区

フルカ峠のローヌ氷河

住んでいたビューレンリンゲン村

通勤路の一枚

モントレーのジャズフェスティバル